

| | |
|-------------------------|---|
| 成分名 | ベヘニルアルコール |
| 英文名 | Behenyl Alcohol |
| CAS No. | 661-19-8 |
| 収載公定書 | 薬添規 外原規 |
| A TOXNET DATABASE へのリンク | https://chem.nlm.nih.gov/chemidplus/rn/661-19-8 |

| | |
|-------|----|
| 投与経路 | 用途 |
| 一般外用剤 | 基剤 |
| 舌下適用 | |

1. 単回投与毒性

該当文献なし

2. 反復投与毒性

2-1 ラット

CD系ラットを用い、ベヘニルアルコールを0, 10, 100, 1000mg/kg/日を約26週間胃管で投与した。臨床徴候に異常は認められず、肉眼的、組織病理学的にも異常は認められなかった。無毒性量(NOEL)は、この試験で用いた最高量の1000mg/kgである。¹⁾(Iglesias et al., 2002)

2-2 イヌ

ビーグル犬を用い、ベヘニルアルコールを0, 20, 200, 2000mg/kg/日を27週間胃管で投与した。2000mg/kg投与群に蒼白便がみられたが、組織病理学的変化は認められなかった。無毒性量(NOEL)は、この試験で用いた最高量の2000mg/kgである。¹⁾(Iglesias et al., 2002)

3. 遺伝毒性

ネズミチフス菌による復帰突然変異試験法、チャイニーズ・ハムスターのV79細胞による染色体異常試験、NMRI系マウスによる小核試験で遺伝毒性を調べた。ネズミチフス菌復帰突然変異試験では、代謝活性化の有無にかかわらず、プレートあたりの復帰変異体数の増加は認められなかった。チャイニーズ・ハムスターのV79細胞による染色体異常試験では、変異コロニーの数または染色体の形態異常に有意な増加は認められなかった。NMRI系マウスによる小核試験では、インビトロで骨髄の多染性赤血球小核の出現頻度の上昇は認められなかった。¹⁾(Iglesias et al., 2002)

4. 癌原性

該当文献なし

5. 生殖発生毒性

5-1 ラット

Sprague-Dawley系ラット雌雄を用い、ベヘニルアルコール0, 10, 100, または1000mg/kgを雄は

交配 71 日前から屠殺時まで、雌は交配 15 日前から妊娠 17 日目まで、胃管で投与したが、受胎能、繁殖に及ぼす影響は認められなかった。²⁾ (Iglesias et al., 2002)

5-2 ウサギ

New Zealand white ウサギにベヘニルアルコール 0, 125, 500, 2000mg/kg を妊娠 6 日目から 19 日目まで胃管で投与した。2000mg/kg 投与群に白色便がみられたが、母体毒性、胎児毒性は認められなかった。²⁾ (Iglesias et al., 2002)

以下については該当文献なし

6. 局所刺激性

7. その他の毒性

8. ヒトにおける知見

引用文献

1) Iglesias G, Hlywka JJ, Berg JE, Khalil MH, Pope LE, Tamarkin D, The toxicity of behenyl alcohol. I. Genotoxicity and subchronic toxicity in rats and dogs. Regul Toxicol Pharmacol 2002;36:69-79.

2) Iglesias G, Hlywka JJ, Berg JE, Khalil MH, Pope LE, Tamarkin D, The toxicity of behenyl alcohol. II. Reproduction studies in rats and rabbits. Regul Toxicol Pharmacol 2002;36:80-85.